

夢殿

八角形の夢殿は法隆寺の中でも最も素晴らしく美しい建築のひとつである。学者であり僧侶でもある行信僧都が 739 年に、聖徳太子を祀る建物として、かつて太子の私邸があり、622 年に死去するまで暮らしていた場所にこれを建てさせた。夢殿という名前は、あるとき聖徳太子の夢の中に現れた黄金の仏の伝説に由来している。また、舍利塔の形をした屋根の上に飾られている、炎に包まれたような宝珠も特徴的だ。木造の八角形の堂宇は日本でも記念堂として使う建物に取り入れられた。夢殿もまた例外ではない。夢殿では聖徳太子を称える祭礼が執り行われ、聖徳太子と等身の秘仏である救世観音像（7 世紀の仏教美術の傑作）が堂内に安置されている。この像の他にも夢殿を建立した奈良時代（710～794 年）につくられた行信の乾漆像や、平安時代（794～1185 年）の僧侶・道詮律師の塑像もある。道詮律師は平安時代の夢殿の修復作業を指導した。